

# 宇治の大君

篠原百合子

## I

源氏物語中の数多の女性達は「愛」という不安定な情緒を中心に、喜び、悩み、憎み、諦観し、又は安定した境地を求めたけれども、例外を除いては皆一度は俗に住み、俗に生き続ける事を望んでいた。当時の女性にとっての俗——生活全体——は当然愛の世界、結婚生活である。彼女等には他の生活はなかったのだから。例外の一人、宇治の大君を取りあげてみたい。

波瀾はあったにせよとにかくきらびやかな第二部<sup>1)</sup>までの世界から一転し、おそらくは読者である姫達とは無縁の状況を作者は出してきた。現世的享楽や利益に遠い、没落した皇族の世界が、第三部においては意味深いものとして描かれている。一転したとは言っても媒介なしではなかった。舞台転換は薫という世にも稀な心を持った貴公子によりなされたのである。権力と愛情という二つの人生の柱を追求する人達の中で、どちらにも背き（積極的には求めず）なにやら世をすね者変り者として自らも認め、此世をいかに厭おうかとばかり考える薫。これまでの物語には考えられないこんな主人公が興味をもち、愛を求め、とても世を離れるなど出来そうにないと思った相手——それは都の御大層な姫君ではなく、最高位への階梯から脱落し、世間から問題にされぬ老親王として宇治に閑居し、仏道修行に明け暮れる方の愛娘であった。もしも世に時めく姫君なら、薫の心にとまっても、これ程重なりあう部分（精神的雰囲気）を認め、執心する事はなかったと思われる。薫が

1) 第一部、桐壺～若菜、第二部、藤裏葉～雲隠、第三部、匂宮～夢浮橋、の分け方による。

大君を知ったのは彼の類ない道心ゆえであった。新しい人物薫に配される新しい女性、宇治の大君の存在する世界とその意義を考えてみたい。それは薫の求婚を拒否するという一事に集約されている。作者は大君によりこれまでの王朝物語の女主人公とは違ったものを描き、昔物語の殻を破る一つの試みをしたのであろう。だがそれが破られたと言い切れない点に時代的制約と作者の現実凝視の厳しい眼を感じる。生半可な現実逃避を否定し、のがれられぬこの世の業に諦めているかのようである。

## II

宇治十帖は薫という道心ある者が、如何に煩惱によりそれを妨げられるかを描いている、と言われる。<sup>1)</sup> 源氏物語第三部は、この道心を持つ新しい人物、薫により開かれる。光源氏は自分の可能性を全て満たし子孫繁栄の基を確立し、種々の愛の形を見尽して道心を持った。宇治の八宮は政治的失脚等で世を諦め、北の方の死で敗残の身の味けなさを痛感し、俗聖への生活に入ってしまったのである。しかし薫は彼等とは異なり、幼時から道心を持っていたと作者は規定している。それは出生への疑惑、亡父柏木追慕、母宮の後世を助けたためだけが原因とは考えられないのである。それ以前に薫が他の人と異なって持って生れたものなのである。薫の道心（観念的）の象徴である香（感覚的）は前世の果報であり、常人と違う重大な証拠であった。……香のかうばしきぞこの世のにはほひならずあやしきまでうちふるまひ給へるあたり遠く隔たる程の追風もまことに百歩の外も薫りぬべき心地しける（「匂宮」142頁<sup>2)</sup>）……と讃えられたのも法華經に言う八十種好中の42「毛孔より香気を出だす」43「口より無上の香を出だす」からと考えられる。又「東屋」（262頁）で侍女が薫を評した言葉からもわかるように法華經藥王菩薩本事品における「若有

1) 岡崎義恵氏「源氏物語の道心」

2) 日本古典全書による。以下同じ。

人間是薬王菩薩本事品，能随喜讚善者，是人现世，口中常出青蓮華香，身毛孔中常出牛頭栴檀之香」がはっきり引用されている。更に例をあげると三宝絵下，修二月の項に「昔毗婆尺仏の涅槃の時長者ありて塔のこわれたるを土をぬり栴檀香を上にかきちらし願をおこし去りぬ。是により九十一劫悪道におちず天に生れ人に生れつつ身香しく口香なり。今迦毗羅城の長者の子と生れかたちよき事ならびなし。身の中よりせむたむの香をいたし口の中より優鉢花の香をいたす」とある。<sup>1)</sup> この様な前世の果報についての説話的知識を作者は勿論心得た上で，薫に特別なものを与えたと思われる。人々から大切にされ，何不足なく昇進も早すぎる程で，この上なく思い上っていた薫が……げに然るべくていとこの世の人とは造り出でざりける仮に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり（「匂宮」141頁）……人間を救済する仏の化身かと思えたのである。讃め言葉ではあるが，何か余程の事がない限り盛んな者には現世否定の契機はなく，後世に余り気を使わなかった当時，周囲が若い薫にそんな雰囲気を感じたのは，すでにこの世ならぬ人としての道心が附与されていたからであろう。そのため自己の道心には少しも不安なく，母宮の頼りない尼姿を見てせめて後世を安らかにしてあげたいと思うのである。宇治の姫達を垣間みて……なほ思ひ離れ難き世なりけりと心弱く思ひ知るる（「匂宮」235頁）……のは現世にも美しく心ひかれるものがあり仲々世は捨てられない，と思うだけで決して道心に不安の念を抱いての感慨ではない。矛盾している様だが充分道心を守りながら，尚かつ気がひかれるのである。今昔物語を見てみよう。波羅奈國の大臣の子は天人が道心を持って生れ出家をとげたし，<sup>2)</sup> 仙道王には後の月光夫人が天上より下って出家を志ざさせたのである。<sup>3)</sup> 仏は難陀に天女を見せて彼の妻を彌猴のようだとやわしめ，<sup>4)</sup> 女が罪を得て苦しむ様子を知らせて沙門に悟りを得させようとしたりする。<sup>5)</sup> 又「宿木」（199頁）

1) 今昔物語に類話多数。

2) 日本古典文学大系による。以下同じ。II-163頁

3) I-100頁

4) I-90頁

5) I-104頁

には……昔別を悲しびて屍をつつみてあまたの年頸にかけて侍りける人も仏の御方便にてなむかの屍の囊を棄ててつひに聖の道にも入り侍りにける……とある。この様に出家、道心は余程の契機がない限り前世からの宿縁として持っていたものか、さもなければ自身で悟ったり無常を感じたからではなく、誰かに助けられての上のことである。「実に善悪の果報皆先世の宿也」との考えは一般に浸透していたと考えてよいであろう。宇治十帖中から取りあげると「手習」（162頁）で僧都が浮舟の美貌を……げにいときゃうざくなりける人の御ようめいかな功德の報いにこそかかる容貌にも生ひ出で給ひけ……と評する言葉からもこの考えが窺える。源氏物語中には『宿世』という言葉、考えが至る所に見られる。人は皆、宿世に操られ抵抗など思いも寄らないのである。全ては宿世によって決定される。自己を罪深き者とみた紫式部はこの宿世からの解脱を求め、「現世は末代濁世、自己は極悪人、弥陀の本願にすがる為には絶対他力の専修念仏を」との源信の教えに傾倒したらしい。弥陀が極悪人を正機とする事は「極重悪人無他方便、唯称念仏、得生極楽」（往生要集下）からもわかる。源信は往生要集で理観を捨て、事観（仏の功德や相好を観ずる）を教え、事観の不可能なものに一心称念の念仏を勧めている。<sup>1)</sup> 即ち阿弥陀仏や浄土の様を観察憶念する観念念仏が主で、口唱念仏は副であった。念仏往生の為の十門（厭離穢土、欣求浄土、極楽証拠、正修念仏、助念方法、別時念仏、念仏利益、念仏証拠、往生諸業、問答料簡）の第四、正修念仏においてそれは説明される。上機の者には仏の相好を観ずる別相観、中機には仏身全体を観ずる総相観、下機には仏の白毫相を観ずる雑略観、極重悪の劣機には帰命想、引摂想又は往生想による称念を勧めているのである。紫式部が救いを求めてこれに傾倒したらしいと言ったが、しかしこれらの教えに全面的に満足したとは思えない。宿世という考えは彼女に抵抗を感じさせた。だが破れない厚い壁であったのではなからうか。そして簡単に破壊出来るほど生易しいものでない事も知っていたのであろう。薫の絶対的ではないが忘れきれない道心がたえず行動を制約するのもその為であった。薫は制約される

1) 往生要集。日本仏教思想史（大野達之助氏著）参考。

自分を省みて、結局は叶わぬ道心故なのだと全てを押しつける。ここに一種の「楽」がある。道心は薫にとって華やかな社会で一層際だって注目される飾り物の一つにもなった。匂宮に……例のおどろおどろしき聖詞見はてしがな（「橋姫」239頁）……等と言われても何か楽しく快い気持ちになりこそすれ、重荷ではなかった様に思われる。内心他の人と異なっている事で得意になったであろうのは、誘いを断わって……例のことに触れてすさまじげに世をもてなすとにかくおぼす（「総角」53頁）……と匂宮から憎らしく思われたことから容易に考えられる。名も地位も背景も理想的条件のために、大変な心おごりをしている薫がその道心の遂行にも現世的欲求の追求にも、中途半端な行動や態度しか取れなかった。両者は相反するものなのである。作者は大君との精神的関係がその後宗教的にまで高められていった、などと安易な解決はしなかった。そんなに甘くはないぞと手ひどくつき離すために現われたのが浮舟であった。彼女は己が意志で出家し、薫は不満ながらも大君の形代としての愛の対象であった女をはっきりと失ってしまった。寂漠たる思いのみが残り、薫の道心などどこにも誰のためにも役に立ちしなかった。道心と人間的煩惱との相剋は未解決の問題として残された。罪の子薫にこの苦悩を与える意図があったにしても、作者にも読者にも永遠に余りに難しい問題であったから。

社交界の花形貴公子薫は「はかなき契」をあちこちに結んでも大して心ひかれる女性もないという様子で、不思議な道心を弄んでいる。多くの女達をひきつけ憧懐させる人気者が、とりすました道心をのりこえ得ようとした女性、宇治の大君は、やはりこれまでの女君とは異なっていた。新しい人物に対応出来る、新しい物語を展開する女主人公は、普通の姫君なみの生いたちであってはならない。作者はこの出発点においても又、宗教的要素を物語の支えとした。まず当然の順序として大君の父八宮に触れねばなるまい。最初に……世に数まへられ給はぬ古宮（「橋姫」208頁）……として宇治という辺地に美しい二人の姫君を抱え、俗聖の生活を送っていると紹介がある。読者はす

ぐ当時の薫の精神の指向性から、世を背き「心ばかりは蓮の上」<sup>1)</sup> という八宮との交わりを思い、そこから姫君とのラブ・ロマンスの可能性を想像する。誠にその通り、ここに宇治十帖を展開する根本の恋物語が生じるのである。しかしそれまでには三年の月日が過ぎねばならなかった。薫は宇治へ男君としてではなく、八宮の道心の様にひかれて法友として行ったのであるから。阿闍梨を介して八宮は……世の中をかりそめのことと思ひ取りいとほしき心のつきそむる事もわが身に憂ある時なべての世もうらめしう思ひ知る初ありてなむ道心も起るわざなめるを年若く世の中思ふにかなひ何事も飽かぬことはあらじと覚ゆる身の程に然はた後の世をさへたどり知り給ふらむがあり難さ（「橋姫」219頁）……と薫の珍らしい心に驚き、讚め、交際が始まるのである。二人の姫達に拘わっているのさえ意に染まず、残念な運命とを感じる八宮は心は聖の日々で、仏典にも通じ音楽をよくし、姫達にはやさしく立派な父であった。しかし現実生活となると全くうとい方なのである。立派な後見もなく学問も深くは習わず、処世の方法などまして御存じなかった。先祖伝来の宝物、遺産もなくしてしまい、宇治の別荘を住居に世を憂しと思いつつ過していらしたのである。このような父に育てられた娘は当然精神的に、都で華やかにもてかしづかれている姫君達とは違ったものを持っていると考えられる。そして妹よりは姉の方が早く、より強く影響を受けたであろう事は想像に難くない。彼女達の性格の叙述場面は少なく、生活態度により各自の特質が示されるのであるが、幼少の時から姉の心ばえはろうたけて深く重々しく、妹はおおどかで可憐で愛らしい、と異なっていた。成人してもやはり姉は今少し重りかで由緒ある様子なのは持って生れた性格だけではないと思われる。父への同情と妹への母代りの愛情を持たせられた女性のやがての役目は、一家の女主人として内外に心を配ることである。自然妹よりも処世の術のなさを知り内攻的に憶病になって行く。自分の運命を予感した八宮は山寺に参籠する事を決心し注意を残していったのだが、それは後々姫君達の自虐の種となった。……さばかりの事にさまたげられて長き世の闇にさへ惑はむが益なさを、かつ見奉る程だ

---

1) 橋姫216頁

に思ひ棄つる世を去りなむ後の事知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず過ぎ給ひにし御面伏に軽々しき心どもつかひ給ふな。おぼろげのよすがならで人の言にうちなびきこの山里をあくがれ給ふな。ただかう人に違ひたる契り異なる身と思しなして、ここに世をつくしてむと思ひとり給へ（「椎本」260頁）……他人の非難を受けて親の恥にならぬよう、ひっそり引きこもり運命を諦めて世を過せと言うのである。世渡り上手に家名を守り生活するという事は、男である八宮さえ難しかった。まして姫君には思いも及ばない。侍女達への訓戒もやはり家門の名誉保持の事であった。薫と大君の出会いの前に道心とも関係深い薫の女性観を一寸見ておこう。……中将は世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なればなかなか心とどめて行き離れ難き思ひや残らむなど思ふにわづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはむはつつましくなど思ひ棄て給ふ。さしあたりて心にしむべき事のなき程さかしだつにやありけむ。人の許しなからむ事などはまして思ひ寄るべくもあらず（「匂宮」144頁）……女に執心して面倒な事になったら出家の気持にもゆるみが出ようと考えてる。冷泉院の女一宮に対しても憧れは抱いても院の隔ての嚴重さは薫の心にまず理性をよび起した。理性を先立てては感情のものである恋愛が本当に実るとは思えない。この薫を見込んで八宮は大君との間を……おのづからかばかりならしそめつる残りは世籠れるどちにゆづり聞えてむ（「椎本」258頁）……としゃれた紹介法で積極的に許したのである。これほどはっきりした父宮の許しもあり、誠実とみられる薫の度々の求婚を、何故大君は斥けたのであろうか。……この人の御けはひありさまのうとましくはあるまじく故宮もさやうなる心ばへあらばと折々のたまひおぼすめりしかど（「総角」28頁）……という心で。

大君の思惟と行動によりその存在意義を知る為に項目に区切ってみたい。

- イ 遺言の力、家門の名誉維持。
- ロ 精神的未発達と自己卑下。
- ハ 自己犠牲への満足。

ナルシシズムとも言うべきもの。

- ニ 薫の性格。

ホ 人間不信と自己否定。

へ 大君の思惟の矛盾。

これらは当然独立しているものではなく、大君という若い女性の中に複雑に同居しており、重複した部分が出るのはやむを得ないと思う。

イ 八宮の生前というより、昔政権から脱落して以来、万事かなわぬ事が多く、年経るにつれ邸内は寂しくばかりになっていった。……たづきなき心地するにえ忍びあへずつぎつぎに従ひてまかで散りつつ若君の御乳母もさる騒ぎにはかばかしき人をしも選りあへ給はざりければ程につけたる心浅さにて幼き程を見棄て奉りにければただ宮ぞはぐくみ給ふ。（「橋姫」210頁）……ほどの窮乏ぶりであった。本来なら腹心のはずの乳母さえ逃げ出したという心もとない有様である。ここに薫が出入りするようになってからは……をかしきやうにもまめやかなるさまにも心よせ仕うまつり給ふ（「橋姫」222頁）……と述べられているように、僧達へ八宮に代わっての布施、宿直や侍女達への心配り、そして八宮没後も姉妹の装束や結婚に関する内々の細かい事までまめやかに世話をしたので、宇治方ではどうやら恥もかかずすんだのであった。つまらぬ人について宇治を離れないようにとの姫君達への遺言、侍女達への零落しても家門の名誉を守り、経済的理由で姫達が身を落さぬよう気をつけてほしい、との八宮の頼みは、狭い世界しか知らず無知な姫達の進路に大きな影響を与えた。当時女性の運命は普通家名によって決り、又与えられた地位を守ることは家名を守ることであったのである。父宮が薫を許していたのを知りながら大君が首を横に振ったのは、第一に遺言である家門の名誉を守る為であった。即ち薫をうとましくは思わぬが頼りになる後見のない身の上では、はれがましい薫に対し到底充分な世話も出来ず縁の長続きする事も思い及ばない。そんな恥しいめは見たくない、といって薫ときっぱり無関係となる事は一層頼りなさを増すことである。後見によりどのようにならざる世なのだからと考え、悪くいえば薫の純情をちゃっかり利用しようとしたのである。自分は父の遺言を守り独身でいて今を盛りの妹の後見として尽し、薫の経済力により浮かび上ろうというのである。八宮が戒めたことではあったが、責任ある立場に残された

大君としては精一杯考えた末の最上策であった。父なきあと彼女は「たのものし人」「さかし人」である事を要求されたのである。女主人の為ばかりでなく自分達の生活のため薫との結婚を勧める侍女達の中であって、妹夫妻の生活を見ては、結婚には権力経済力を持った力強い後見が必要であることを痛感させられた。自分と薫の事など絶対駄目だと諦めざるを得なかったのである。だが中君の為には薫の力を借りねばならない。経済力という主導権を握られては精神的に大変なハンディキャップであった。薫がもう少し「なのみ」であったら（両者の差が縮まる）と思う大君の心にはもし逢うなら対等でとの考えがあったのである。それが家門の名誉保持なのである。そして作者は大君に同情的であり、必ずしも権門の貴公子薫を全面的に支持しなくなっているのは、第二部までの主人公光源氏と異なる点である。父宮の遺言に背き妹を人並に扱おうとしたあやまちはたえず心を責めた。これ以上罪を重ねたくないと思う大君にとって、阿闍梨の夢の話<sup>1)</sup>は大きな傷手であった。これほど一人で心を砕き家名を守ろうとした甲斐もなく、父宮は自分達のため中有に迷っていらしたのである。

ロ 大君の思惟は当然環境により大きく制限された。宇治という片田舎で都との交渉もほとんどなく、たいした経済力もなく世間智にうとい俗聖の生活を送る父にどうか育てられたのである。普通の姫君ならば男性に対してある程度の心構えもあろう。……いひ知らずかしづく物の姫君もすこし世の常の人げ近く親兄などいひつつ人のたたずまひをも見なれ給へるは物のはずかしきもおそろしさも斜にやならむ。家にあがめきこゆる人こそなけれかかる山深き御あたりなれば人に遠くもの深くてならひ給へる心地に思ひかけぬ有様のつつましくはづかしく何事も世の人に似ずあやしう田舎びたらむかしと（「総角」55頁）……巧者で才ある中君でさえ田舎びていることを恥しく不安に感じているのである。まして大君は男性に対して人並以上の羞恥心、恐怖、警戒心を持っていたと考えられる。大君の思考を偏狭にしていた自己卑下の気持の一部は逆に気位の高さ

1) 総角93頁

を示すともとれる。例えば下人であろうと都の者には琴の音を聞かせぬ<sup>1)</sup>とか、匂宮への返事は父から勧められても拒否し中君に書かせる<sup>2)</sup>などには、はかない自尊心が見えるのである。大君は薫の意を知っているが……違へじの心にてこそはかうまであやしき世のためしなるありさまにてへだてなくもてなし侍れ。それをおぼしわかざりけるこそは浅き事もまじりたる心地すれ（「総角」17頁）……最初から世間並のことなど考えてはいない、あくまで友人として対処するのだという。当時の男女関係を考えてみても例のないほど珍しい事である。だが重荷を背負いあえかな神経を切り刻む、頼もし人の必要な大君のような女性がどうして初めから木石になどなれようか。殻に閉じこもる苦しさに耐えられず、真情を吐露したのは……この人の御様のなめぬにうち紛れたるほどならばかく見馴れぬる年頃のしるしにうちゆるぶ心もありぬべきを（「総角」29頁）……のただ一度だけであった。激情から理性へすぐに戻ったところに彼女の悲劇があった。この理性は男性を避けたいという感情に裏打ちされていた。そして身体や容色の衰えを自覚してはいよいよ自己卑下の気持を強くしていく。この大君の閉された思考範囲も薫によりだんだん広げられていったのだが自ら限度があった。大君と同様若くして死んだ夕顔はその死は悲劇的であったが、積極的な愛の歓びの中に死んだ幸せな女、とも考えられる。ところが種々の条件により、大君の指向する世界は現実の愛以外の場所に求められ、しかも何も叶わぬうちにベルが鳴り、幕が下りたのである。

ハ 大君は自分の恥しい様子を知られ軽く見られる事を大変つらがり、<sup>3)</sup>薫との結婚そのものを「あるまじき事」<sup>4)</sup>と嘆き恐れていた。そのくせ薫から友人でいまいしょうとなつかしげに語られると、おそろしさもなごんでしまうという単純さなのである。物をへだてて話すなら安心して心のへだてなく話せるとの言葉には、はっきり男性拒否の意志が出ている。自己をいとおしみ、品位を保ちたいという本能と理性のため薫とは不即不離の関係でいこうとす

1) 橋姫225頁

2) 権本254頁

3) 総角24頁, 25頁, 49頁

4) 総角26頁

る。迫られても見放されても困る女が、自分の意志を通すにはこの手段しかなかった。自分は昔から恋愛の方面は思い離れた心でいるから妹を、との勧めも薫の心を動かさず、身勝手な自己満足の方法に終る。潔べきな大君がたとえ方便でも「身は逢わずとも心は妹と同じ」などと口にしたのは、無意識ながらコケットリーの働き故と思われる。だが薫の侵入に対しすばやくかくれたのは妹を残してと計算した上ではなく、反射的本能的に危険から逃れたのである。弁に言わせればあさましい程気強い結婚忌避であった。中君と薫を何とかあわせようと一人で力んでいるのも妹の為より自己保存的、自己中心的に感じられる。そのくせ自分の気持も抑圧しているのである。……やうやうことわり知り給ひにたれど人の御上にても物をいみじく思ひしづみ給ひていとかかる方を憂きものに思ひはててなほひたぶるにいかでかくうちとけじあはれと思ふ人の御心も必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ。われも人も見おとさず心違はで止みにしがなと思ふ心づかひ深くし給へり（「総角」67頁）……妹夫妻の事、父のこと、と相つぐ衝撃に倒れた大君は回復を願うどころか、ついでに何とか死んでしまおうと考える。……この君のかく添ひ居て残なくなりぬるを今もて離れむ方なし。さりとてかうおろかならず見ゆめる心ばへの見劣りして我も人も見えむが心安からず憂かるべきこと（「総角」95頁）……自分も相手も下げたくない。もし生き残ったら病気にかこつけ尼になろう、それでこそ互に真心を見つぐ事が出来るのだと自らに言いかせるのである。かけがえのない人だから平安な状態でいたい。この犠牲的な心を抱きしめての満足は、一種のナルシズムへの傾きを示している。

ニ 決して女に心を乱すまい「かなはぬ心つきそめなばおほきに思ひに違ふべき事」<sup>1)</sup>とすまして言って、匂宮に憎らしく思われた薫なのに大君に心を傾けてしまった。だが匂宮のように情熱にまかせてというのではなく、あくまでも女性の同意を得て、とフェアプレイを心がけた為に実らぬ恋に終ってしまった。何不足ない条件を備えている自信からはこのような結果は予想できなかった。恋愛において思考が伴っていたらどこかで必ず故障が起る

1) 橋姫238頁

であろう。まして道心などその最たる原因となるはずのものである。八宮の許しもあり競争相手もなく、すでに「領じたる心地」<sup>1)</sup>で無理に結婚を急ぐでもない落ちつき払った態度で接したことは、大君に必要以上の気おくれを感じさせたと思われる。兄夕霧にさえ気のおける弟<sup>2)</sup>として遠慮させるものを薫は持っていたのである。薫自身煮えきらなさを知りながらまっすぐ進めない。「心にくき程なる火影にみぐしのこぼれかかりたるをかきやりつつ見給へば」<sup>3)</sup>とまで迫っていて、「おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむ」と思い返す。大層フェミニストのようだが、むしろ憎からず思いながら種々の条件で悩んでいる、複雑な女心を知らぬ偽善者である。「御心ゆるし給はずばいつもいつもかくてすぐさむ」<sup>4)</sup>と無理にのんびり構えたのも、結婚の成就を信じていた為であろう。大君にするりと逃げられた時も誠を見せるため頭を働かせ、光源氏や匂宮ならどうなったかわからぬ中君との一夜を事なくすませた心強さであった。こんな厳格さも好意も種々の厚志も、大君には重荷となったであろう事は容易に察せられるが、それ以上に六の君を……人の上に見なしたるをくちをしとも思ひたらず何やかやともる心にあつかひ給へるを大臣は人知れずなまねたしと（「宿木」165頁）……に示されるような薫のもつ冷たさ（理性に基づく）を感じとっていたと思われ、それは何ともしようのない事であった。あれほど執拗に大君を求め、失って嘆いた薫が、あとを追って投身したいと言う弁の歌に対して……それもいと罪深かなることこそかの岸に到ることなどかきしもあるまじきことにてさへ深き底に沈み過ぎむもあいなし。すべてなべてむなく思ひとるべき世になむ（「早蕨」123頁）……と諦観の言葉をはくが、これは道心に向ってではなく、現実から離れられない態度を示していると思われる。薫は結局常識世界、俗世の住人であった。

ホ 自分はこのまま埋れようという大君の心に一層強烈な影響を与えたのは、匂宮の行為に対する不信であった。一度は薫の謀計にかかったと恨めし

- 1) 椎本259頁
- 2) 早蕨128頁
- 3) 総角 24頁
- 4) 総角 34頁

かったのに、気を取り直し中君夫妻の世話にかかりきっていたのである。…疎にはあらぬにやと思ひながらおぼつかなき日数のつもるをいと心づくしに見じと思ひしものを身にまさりて心ぐるしくもあるかなと姫宮はおぼし歎かるれどいとどの君の思ひしづみ給はむによりつれなくもてなして自らだになほかかること思ひ加へじといよいよ深くおぼす（「総角」65頁）……と世の中を思い捨てる気持にますます拍車がかげられた。宇治の紅葉狩に際し匂宮が訪れなかった事は大君にとってひどい傷手であり、男というものは虚言をよく言って思ってもいない人を思っているように言葉を尽す、との侍女達のお喋りも下々の者だけでなく、匂宮のような立派な身分の方にもあてはまると思い知ったのである。薫に慰められても不信は消えず、むしろ深い真心を見せる薫とてあてにはならぬ、と疑いを増していった。「我も世にながらへばかうやうなる事見つべきにこそはあめれ」<sup>1)</sup>と考へ、自分だけは世の憂き目にあわず、罪の浅いうち何とか死のうと思ひ続けるようになる。家門の名誉という重圧の下で、頼り所のない若い女が人笑えにならぬようにと心を砕けば、死を願う気持にまで行きつくのであろうか。大君が妹と自分を同一視し嘆きすぎるようにも思えるが、時代性と自己愛の広がりを見てよいのではあるまいか。同じ環境で年も二才しか違わぬのに二人の性格や進路、物の考え方の対照的な事から、大君がいかに翼を広げて妹を守っていたかがわかるのである。そして一人ではもう力尽きた。中君のおおどかさや信じる努力をみていると、作者はいつもこのよな人を守っているように思われる。中君の姿勢には積極的に事態に順応する処世術が天性備わっている。大君は自然の成行きに背きすぎた。だが男性不信、現実厭離の心に何とか光を探し、友情の世界に活路を見出したのである。これは相手も自分も見下げたくないという結婚否定の思想から当然行きつく境地だが、当時の姫君の考えとしては特異なものであろう。大君は運命的に結婚しない、出来ない女性として創り出された。他の女のように男君をひたすら信じ、生きようとはせず、自分で考へ行動した。又せねばならぬ立場であった。『意志』は否応なく働らかされたのである。大君の世界が狭か

1) 総角 77頁

ったとはいえ、男性不信の原因が匂宮と薫だけでは弱く感じられる。物語の表面には描かれてはいないが、ファーザー・コンプレックスの裏返しとでもいったものがあったのではあるまいか。最も信頼すべき父宮が北方死後の一時の慰みに、後の浮舟を生ませたことは大君の幼時ではあっても、彼女の心に一刷毛の薄い影を投げたと考えられる。その影が二人の貴公子により濃く重苦しく、大君を圧倒するほどに塗りこめられていったと思われるのである。

へ 大君のゆれ動く思惟を二つに大別して考えてみよう。

1. 甘美な恋愛の世界，平安朝的情緒の勧誘への傾き。
2. 理性，意志世界の厳しい現実対処。

結局作者は2の意志を勝たせたが、それは読者（平安朝の代表的姫君方）の希望を完全に裏切ったものであった。大君は平安朝的情緒にしばしば引かれながらも……一ところおはせましかばともかくもさるべき人にあつかはれ奉りて宿世といふなる方につけて身を心ともせぬ世なればみな例の事にてこそは人わらへなるとがをも隠すなれ（「総角」33頁）……不安な境涯のもたらすものを考え、涙をのんで振りきったのである。自分の幸福を犠牲にする代償に妹の人並な待遇を求めた。妹思いと共に同一視により、自分の果せぬ望みを今を盛りに美しい中君にかけたのである。薫とは平行線を保つことを心がけ愛想のない態度をとっておきながら、一方冷淡になられたら困ると心配する。2の意志世界へ1の情緒がチラチラと顔を出すのである。あきらめたようでも甘美な愛への傾斜がのぞいていると言える。ついには薫をありがたい方と思い知り、互の思慕を美しく残すために看護の薫にうとましく見られたくなく、思い限なく物を言うのもひかえるようになるのである。いよいよ重態という時に男君ではなく親友に……日頃おとづれ給はざりつればおぼつかなくて過ぎ侍りぬべきにやとくちをしくこそ侍りつれ（「総角」91頁）……と息の下に本当に頼りにしていた心情を述べる。1と2の感情の中にたゆたいながら、薫に良い思い出を残そうとうちとけ、思いをさますような状態ではなくなつかしげに美しく終るのである。先に2が凱歌をあげたと述べたが完全な意志の世界ではなく、作

者は大君に女性としての限界を保たせていると思われる。紙数の都合で省略した部分が多いが、大体以上の六つの点が大君の思惟や行動の原因と考えられる。そして各々が一見矛盾しているようにみえてもそれはやがて一本の線に統一され、大君という一人の若い女性像を浮きぼりにしていくのである。

### Ⅲ

薫の精神にふさわしい女性としての才智、態度をもって生み出された大君は「新しい」男性薫の愛の対象として「新しい」地位と意の世界を持たせられた事に意味があった。それゆえ愛は悲劇的葛藤を生じ、やがて気持を昇華させるより高い愛の次元を求めて成長していった。薫の道心と煩惱、大君の愛と宿命との相剋の中に美を認めた作者は死にまで美を与えている。薫の思い出話につけても匂宮が……世にためしあり難かりける中のむつびを「いでざりともいとさのみはあらざりけむ」とのこりありげに問ひなし給ふ(「早蕨」115頁)……のも常人として当然でもあったであろう。清らかで厳しく霊的とも言える愛の関係で終わったが為に、永く薫の忘れられない事となったのである。作者のあこがれの境地ではあるまいか。世の憂さを知り出家を志した薫は母や中君の事が気になり仲々本意をとげられない。そして大君が生前、身を分けても心は同じ、と勧めた中君をつきせぬ慰めにと考えだす。これは予想された事ではあるが作者が次の展開をはっきり知らせる事となる。女二の宮との縁談を承知しながら「くちをしき品なりともかの御ありさまにすこしも覚えたらむ人は心もとまりなむかし」<sup>1)</sup>との思いで浮舟へと移るのを納得させるのである。一足とびに浮舟を出すことは許されない。中君はつなぎ役であり浮舟によって薫が味わう救い難い苦悩は運命的なもので、大君はその為に絶対必要な過程であったとも言える。こうみてくると第三部の女性、大君、中君、浮舟はいづれも薫の物思いを深め、人間の求めるものを妨げ無視し屈服させ

1) 宿木140頁

る強大な力の存在を知らせているようである。大君の境地には少くとも普通の姫君よりは宗教的要素が含まれていたと考えてよいであろう。だがその理解の程度というのはかなり低いと思われる。……罪深かなる底にはよも沈み給はじいづこにもいづこにもおはすらむ方に迎へ給ひてよ。かういみじくもの思ふ身どもをうち棄て給ひて夢にだに見え給はぬよ（「総角」85頁）……の嘆きは尤もだが現世を厭離し、勤行の功德をつみ、成仏したはずの人ならばこの世の事を気にかけて夢に現われるようなことはないはずである。極楽浄土に行かれたと信じている父宮に、夢にでも出てきてほしいと希う心はわかるにしても、仏教と大君の関係の浅さ、ひいては読者と仏教の隔りを示すものではあるまいか。御修法の声も……法華経を不断によませ給ふ声たふときかぎり十二人していと尊し（「総角」91頁）……と感じを描いただけで経の何が尊いのかは書いてない。……陀羅尼よむ老い枯れにたれどいと功づきて頼もしうきこゆ（「総角」93頁）……も同様である。読者が女性、又物語という制約から当然かもしれないが。当時の姫君達の仏教的教養の限界は……半なる偈教へけむ鬼もがなことつけて身も投げむ（「総角」103頁）……が理解できる程度の仏教説話ぐらいであったと思われる。恋愛と呼べるなら、これは源氏物語中最も宗教的においのする恋愛なのは、薫の口に出す道心と八宮の無言の精神に影響を受けた大君の心ゆえである。大君の方は一応その死をもって解決されたといえるが、薫には何の打開策も与えられなかった。それは常に聖だっているのだと自分で言いふらしても、現実生活において充たされている者の、ないものねだりのようである。例えば女二の宮との縁談でも……今更に聖やうのものの世にかへり出でむ心地すべきことと思ふもかつはあやしや（中略）后腹におはせばしもと覚ゆる心のうちぞあまりおほけなかりける（「宿木」137頁）……作者が批判するように、時めき世俗の権力を持つ人達とのつながりがきれていない、又断ちきろうとも考えていないのがはっきりわかるのである。弁の尼から出生の秘密を聞いた時の、薫の現世の栄華や名利についての顧慮は小穴氏の論文に詳しい。<sup>1)</sup> 薫の道心

1) 小穴規矩子氏・浮舟物語の構想（国語国文31年5月）源氏物語第三部の創造（国語国文33年4月）

が口先だけで非現実的なのは、作者が観念的に作りあげた性格に基くものである。先天的道心と共に現世的権力と美という理想的条件を与えられた精神が、現実にも未来世にもひかれるのは観念的に創られた必然的な弱味である。新しく創造された薫が落ちつかずさまようのは、暗い出生ゆえ当然の宿命だなど因果関係による説明はつけたくない。宿世というものを脱しかかっているとみたい。第三部は薫が苦悩を去るための彷徨の過程であり、それは作者自身のものでもあった。家集の……身を思はずなるとなげくことのやうやうなめにひたぶるのさまなるを思ひける「かずならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり」「心だにいかなる身にかかぬらん思ひしれども思ひしられず」……はよくそのような境地を表わしていると思う。彼岸への厳しさを中途半端な態度でごまかしたくなかったのである。不徹底な態度では脱せないこの世ゆえ、決定的解決が与えられなかったのだと思われる。薫にそうしむけたのは大君の存在であった。

(付記)

本稿は昨年一月に提出した卒業論文の一部をまとめ直したものである。本稿執筆にあたり玉上琢彌先生に、数々の御指導、御配慮を頂きました。厚くお礼申し上げます。